

京鹿子

昭和二十三年九月二十日第三種郵便物認可
平成二十三年五月一日発行
紙幣一〇圓一年(銀紙一圓一日紙幣)



5月号

豊田都峰

灌響集 その二十一

額縁売るどれにも春灯はめこみて
信長を追へば枯木の影法師
梅咲けば咲いたで題目辻説法
香のしむ和紙をもとむる梅のころ
野末まで晴れ佐保姫の領布めく雲
野遊や尾のありし日の遠からず



磯遊火を得し日よりはろかなる
水仙の大きなひなたは先師の座
湖東なる春田や空を入れあます
明日香路の地図に咲いてゐるげんげ
村越えてまた竹秋の風となる
まだあさきあふみの春と承知して
義仲忌ころのさむさと吹かれ佇つ
春光の描きし沖の帆の二つ

十三参り 丸山佳子



嵯峨ハツピーをんなばかりの寒稽古
十三参り押すな引くなのみ教えを
余生とは思う日なくて白日傘
待たせたる夜長枕にあなかしこ
曆にも無い事起り衣更え

秀華採集

草じらみなんだかんだと添ひとげぬ

荒川 美 邦

たいへん俳諧らしい作品。それは季語としての「草じらみ」が成功をもたらすが、このような雰囲気の中で、自分史が語れることは幸せである。

冬木の芽ほつほつどつちにも向いて

中 島 悠美子

押入れへ家風を仕舞ひ松の明け

山 本 正

前句の「どつちにも向いて」にひとつの命の姿が描けている。後句の「押入れ」を設定したことが俳諧の味わいを出すことに成功している。

鈴鹿 仁

木曾ものがたり

花落忌のひと日は雲のあとを追ふ

海道忌磨り跡深し硯石

名残花約束ごとの一つ増ゆ

凍ゆるむ木曾ものがたり風と聴く

春すずめ義伸びいきの嘶など

近 詠

和田 照海

飛島海峡

枢窓とぢてくら闇冬の鵙

葬終ゆ飛島海峡雪しまく

海峡の口にかかりて寒汽笛

河馬の尾に鰐の目玉に春立てり

飾るより仕舞ふ厄介雛納め

神麓集



さわらび 林 日圓
光悦寺拳をひらく初蕨
さわらびの光悦詩絵硯筥
行者径踏み分けゆけばわらび闌く
春の闇黒地に金の平詩絵
蓋うらも螺鈿の蕨描かれし

松田都青
立つ気なく寝る気もなくて寒卵
八百も嘘はつけない去年今年
去年今年生活常に埃あり
女正月伸びたがらない輪ゴムあり
安物を買ふに決断する寒さ

父の齡 北村香朗
父の齡に差がつくばかり節分會
父の齡遙かに遠く豆撒きぬ
立春や遙かに越えし父の齡
空に置きもののするどく寒晴るる
寒晴れや晴れ渡りたる相模灘

春よ来い 丹生をだまき
激痛を訴ふ妹寒早
日にち葉日にち葉と春を待つ
春よ来い試歩に励める妹に
病みつゝも雛を修理に出すと云ふ
長病みの妹に草青み初む

一の午 藤岡紫水
すれ違ふをんな婀娜めく一の午
紅梅の蕾みて刻をふくらます
上げ汐に舟足早し若布刈舟
涛音の近くて遠し実朝忌
辛辣の句評一言春寒し

山田をがたま
要らぬ物詰まる抽出し寒明くる
診療は半年後でよし二月果つ
春陽浴ぶ卒寿の夫と会話なく
飾れぬを詫びてせめても雛の軸
寒もどり戸外のリハビリ一頓挫

神麓集



残花の章

竹貫 示 虹

次々の訃報身近に残り花
途方なき空に残され桐の花
みなもとは冥し若葉に日はあれど
もの言はぬ男残りぬ薔薇散華
薄明の熟睡に寧し繭の中

服部 郁史

嵯峨あるき好むひとりよ黒コート
さびしさが無口となる日々冬木影
こゝだけの悪口愉し冬屋台
釘一本打つて冬至の心締む
出嫌ひの日々まんさくに雲増える

梅

柴田 朱美

梅林へ母の面影たどりつつ
白壁に影をおとして梅三分
久闊を梅に預けて手を握る
梅の寺僧の婚礼近づきぬ
煙突が絵になる町の梅日和

春そこに

北川 孝子

虚も実も鳥の囀せる寒日和
影が先ず動きて寒中速歩かな
忘却とは出発かとも春そこに
春一番だんまりといふ反論も
近景は先ず春暁の塔の先

伊藤 希眸

地震遠し芽吹き街で客死せり
島ほどの客船着けり春の雪
春遅し膝つきあはず船の客
集客の一つ二つと沈丁咲く
春祭たちまち客の貌となり

冬もみぢ

丸井 巴水

血の濃ゆき者が囲みし牡丹鍋
珈琲の苦味寒夜の街はづれ
観音に惚れこんでゐる冬もみぢ
雪雲の重きを削る愛宕山
日向ぼこ肩甲骨を寄せてみる

川崎光一郎
スーパーの目玉商品寒卵
晩年もまだ夢があり春來たる
線路ぎわ悟り貌して路の臺
朝に呑む錠剤六種春寒し
野仏の生みしか初蝶ひらひら出づ

船越美喜

北窓に一つの星や冴返る
音もなき雨とはなりし春社かな
春の夢さめて遠くへ行きし人
窓硝子透けてアネモネ濃むらさき
いま一度お顔見つめて雛納む

大村美知子

竹の秋赤い句帳の終りけり
アネモネの黒い瞳に陽の力
アネモネや強気な人は苦手なり
春の夢余生にもある密かごと
北窓を開けても齡ついてくる



自句随解

四五本の丘のすすきの雲あそび

平成十四年作

具体的描写は俳句の特色。そんな立場で考えると数字を用いるのも賢明な方法と言える。

落葉路のひとすぢほそく日がくれる

昭和二十五年作

風景からこぼれ冷えきる塚ひとつ

平成 五年作

一本の樗を据えし初景色

十三年作

特に「ひとすぢ」は愛用句の一つである。

四五本の枯草の陽に亡母がある

昭和 六十年作

五本なる丘の樗の落葉かな

平成 十三年作

月代や岸四五本の木立かな

十五年作

つばめまた反りて川端三丁目

十一年作

句集『雲の唄』芒・秋



京鹿子集

豊田都峰選

草じらみなんだかんだと添ひとげぬ

城陽 荒川 美邦

蟻螂のまだ枯れ切れぬ目の泳ぎ

丈低き母超えられず蕪むし

人日の独りの影の水を釣る

冬木の芽ほつほつどつちにも向いて

東京 中島悠美子

風呂敷に包まれてゐる淑気かな

枯蓮田甲骨文の袴めける

野兔の足跡まつ白な地球

押入れへ家風を仕舞ひ松の明け

京都 山本 正

餅花や老舗そば屋の人の列

飛び石も垣もしらじら寒の寺

冬の虹頭寄せ合ふピルの窓

アリゾナの空澄み渡る冬の朝

春隣笑顔で終るデイスカツシヨン

冬の夜実験手技を語り合ふ

日脚伸ぶ実験記録をフアイルして

悠々と吹雪呑込む最上川

南天や実も葉も今は雪の中

鈴の尾の錦は不燃の松納

かまくらや口もふさがる又も雪

アリゾナ 伊吹 之博

酒田 藤波 松山